

## 寒波に伴う農作物等の事前・事後対策技術について（1月）

平成22年1月8日発表の気象情報によれば1月13日頃より、平年より気温が低くなる予報となっています。今後の気象情報に注意してください。

下記に対策を示します。

### 記

#### 1. 甘しょ

##### 1) 寒害技術対策

- (1) 貯蔵中のいもは、低温に合うと腐敗することがあるので、10℃以下にならないようにワラ囲い等で保温に努める。また、屋外貯蔵の場合は、いもがまに冷水が入らないように注意する。

#### 2. ばれいしょ

##### 1) 寒害技術対策

- (1) 冬作、春作ばれいしょの植え付け、マルチ張り作業はその地域での寒害発生時期を回避できる時期に行う。また、寒害の恐れがある圃場は、種いもの腐敗防止のため、やや深植えにする。
- (2) トンネル栽培の場合はビニール等の破損や隙間風がないか点検しておく。

#### 3. 野菜

##### 1) 寒害（霜害）技術対策

〔共通〕

- (1) ハウス、トンネル栽培の場合は、ビニール等の破損や隙間風がないか、ハウス栽培では、暖房機や二重カーテンなどによる保温が十分できているか点検しておく。
- (2) ビニール、べたがけ資材被覆、マルチング等により気温・地温の確保を図る。
- (3) 生育初期における窒素質肥料の多施用を避ける等、健全な生育管理に努める。
- (4) 早まき、早植えを極力避ける。
- (5) 積雪による被害を受けやすい地域では、施設の破損、倒壊を防止するため、施設の点検に努め、必要に応じて補強、破損か所の補修を行う。
- (6) 積雪時には、栽培施設内の温度を高め、積雪の落下を促進する。また、速やかに除雪を行う。
- (7) 被害が発生した場合には、欠株の補植、速効性肥料の施用等適切な肥培管理により、草勢の回復を図るとともに、病虫害の防除を徹底する。

#### 4. 果樹

##### 1) 寒害（霜害）技術対策

- (1) 晩成かんきつ類は、異常低温襲来前に収穫するか、袋かけまたは防寒資材で樹冠を被覆し保温に努める。
- (2) 防風垣（網）を補強する。
- (3) 冷気の停滞する所では防風垣の下枝を1m程度刈り上げ、風の流れを良くする。
- (4) 積雪による枝折、裂傷を防止するため枝を縄で結束する。
- (5) 積雪の場合は、早急に除雪に努める。ハウスに積雪した場合は、内張りカーテンを巻き上げ屋根の雪を溶かす。また、必要に応じて除雪も行う。除雪作業は危険を伴うので十分注意する。

## 5. 花き

### 1) 寒害（霜害）技術対策

〔共通〕

- (1) ハウス栽培の場合は、ビニール等の破損や隙間風がないか、暖房機や二重カーテンなどによる保温が十分できているか点検しておく。
- (2) 低温により開花遅延が懸念される品目（キクなど）については、暖房機等を利用し、適切な温度管理に努める。
- (3) 生育初期における窒素質肥料の多施用を避ける等、健全な生育管理に努める。
- (4) 積雪による被害を受けやすい地域では、施設の破損、倒壊を防止するため、施設の点検に努め、必要に応じて補強、破損箇所の補修を行う。
- (5) 積雪時には、栽培施設内の温度を高め、積雪の落下を促進する。また、速やかに除雪を行う。
- (6) 被害が発生した場合には、欠株の補植、適切な肥培管理により、草勢の回復を図るとともに、病害虫の防除を徹底する。

## 6. 茶

### 1) 寒干風害技術対策

- (1) 防風垣（網）などを整備する。特に幼木園では防風作物のソルゴーを刈り揃え、立ち枯れ状態でうね間に残し防風垣に利用する。また、低温に対しては、条間に敷き草を厚めに敷き株元の保温に努め、凍害による幼木樹の幹割れを防ぐ。
- (2) 寒干害（青枯れ）に対しては、うね間の敷草などを事前に行って土壤の乾燥や地温の低下を防ぐ。
- (3) 12月に使用していない場合は機械油乳剤を散布する。季節風の強い所では、茶株面の直接被覆と組み合わせる。（機械油乳剤は赤焼病を助長する場合があるので常発園では使用を控える。）
- (4) 積雪時には、茶株面の雪は払い落とさず、自然融解させる。
- (5) 赤焼病の発生がある場合は、初期にカスガマイシン・銅水和剤で防除する。青枯、赤枯の被害が発生した場合、春整枝時期にせん枝で除去するのでそれまでは現状を維持し、防寒対策を継続する。

## 7. 畜産

### 1) 寒害技術対策

〔家畜飼養管理対策〕

- (1) 給水施設の凍結を防止する。また朝・晩に凍結確認・点検を行う。  
（例）・パイプを断熱資材（発泡スチロールなど）で包む。  
塩化ビニールパイプは、「黒色ポリパイプ」に取り替える。
- (2) 畜舎のすきま風を防ぎ保温に努めるが、換気に留意する。  
また日光が当たる側は可能であれば、側壁、屋根の一部を日光が入る透明の「ポリカーボネート波板」に替えることも有効。
- (3) 敷料は多めに行い、湿った敷料は早めに搬出する。
- (4) 特に3カ月令までの子牛は敷料を多くし、子牛房の一部に電熱球（豚用コルツヒーター、投光器など）を下げて保温や保温箱の作成設置など保温対策を組み合わせる。なお、設置の際は火災など安全面には十分留意する。
- (5) 子牛の防寒、下痢予防に手作りベストや保温ジャケット、オーバー（市販品もある）の使用も有効。

- (6) 母牛は「昼間分娩法」(朝6時から夜9時までに8割を分娩させる方法)を行い、深夜・夜明け分娩による事故を防止する。  
「昼間分娩法」とは分娩2週間前から分娩するまで、1日分のエサを夕方1回のみ給与する。給水は自由、朝にエサが残っている場合は取り除く。

[飼料対策]

- (1) 寒害時の刈り取りは避け、生育が回復してから行う。  
(2) 発芽が悪い時は、早めに追播又は播き直しを行う。  
(例) ・発芽不良や春の飼料不足のため、12月以降に播種する場合は、極早生えん麦を2月下旬に播種量10kgで散播すると5月下旬から6月上旬に収穫できる。  
(3) 生育が悪いときは、暖かくなってから追肥を行う。  
(4) 寒害に強い草種(イタリアンライグラス等)を選択する。  
(5) 粗飼料の不足に備えて、稲わらや、その他貯蔵飼料を十分確保しておく。